

大西良慶と堀至徳

——大西良慶書簡を中心として——

春日井真也

現時の日本は日本の日本に非ずして世界の日本なり、我が仏教亦此の如く、単に日本支那印度の仏教にあらすして実に世界の仏教たらざる可らず、我が日本が列國^{ニッポン}圍視の中に在りとせば、我が仏教亦実に列國^{ニッポン}環視の中にあるべし、誰か此事実を拒否せんや、若今の時にして広く眸を海外に放たず、僅に自己の周辺を凝視し、自ら以て我が仏尊しと揚言せんか、空しく識者の嗤笑を招致せんのみ。

夫れ自ら其正邪是非を弁識するは難し、必ずや公平なる識者の叱正を待たざる可らず、我が仏教の徒、其奉ずる所を以て自ら尊とし自ら真とす、而して未だ其何故に尊にして何故に真たるを究めず、又其所行を以て正にして且つ是なりとすと雖、若し外人にして之を視んか、果して認めて以て正にして且つ是なりとせんや、吾人仏徒大に注意せざる可らず。若し夫れ真に仏教の弊竇を釐革せんと欲せば、外人の所言に参酌せざる可らず、若し真に仏陀の光輝を恢弘せんと欲せば、外人の所觀に鑒識せざる可らず、是れ余が此小著を公にする所以なり。

明治33年1月 西山栄久著『外人ノ眼ニ映スル仏教』自序の部分より

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 1 はしがき | 2 書簡第1 | 3 書簡第2 |
| 4 書簡第3 | 5 書簡第4 | 6 あとがき |

1. は し が き

今回も天理市丹波市町堀広良氏の文庫から新出した資料にもとづいて論究を進めたい。

昭和50年という時点において、明治8年(1875年)生れの大西良慶和上は、満100歳をもって京都清水寺に、「北寺の伝」の唯識教学を伝える北法相宗管長として、御健在である。1年おそい明治9年に生れた堀至徳は、明治36年(1903年)現在のパキスタンのラホール市において破傷風により、27歳の若さをもって、死去している。そのあとからだけでも73年の経過が数えられる。昭和39年(1964年)数え年90歳をもってインド仏蹟巡拝を行った大西良慶は、カルカッタ市で忘れずに訪問したアジアの詩聖ラビンドラナート・タゴール(1861—1941)の生家ジョーラサンコの庭に立って、そこに住んだ亡き友、堀至徳を偲んだことを、のちになって堀至徳の縁につらなる堀広良に次の如く書いている。

去冬カルカッタにて タゴール翁の御邸宅拝見 其肖像之前に御花を供
えしみじみ^{スツ}往来しことども思ひ 出し申候御盆が来ましたので再び思
ひおこす

清楚なる住居たつねて此君の
心のかげをなつかしみ見る
わが友は君をしたひて来しままに
かえらぬかずに入りしと思ふ

この書簡は昭和40年8月3日付(8月4日東山局消印)であるから、死後60余年間に亘って大西良慶の心の中に生きつづけている、多武峰の縁故につらなる堀至徳の人間像の大きさを思うものである。

論題の直後に掲げた西山栄久の文章が、明治30年代の日本精神史のなかに流れた否定することの出来ない潮流の一つであったことを確認した上で、その事実の上に今回紹介しようとする明治35年から36年に亘る頃、大西良慶より堀至徳に宛てた4通の書簡を重ねて見るとき、インドと日本の距離をもっ

て二人の間に交流した情念とともに、それを育てた社会通念との間にかもし出される微妙な屈折の様相が、廃仏毀釈の傷あとがなお残る大和の風物のなかに新らしく甦りゆく信仰形態を背景として、浮び上がってくるのである。この様な意味からこのたびは、若干の解説を加えて、大西良慶書簡の一部を資料として紹介する場としたい。

2. 書 簡 第 1

明治34年11月12日朝九条家へ寄留した堀至徳は、11月16日奈良県庁へ旅券申請を行った。11月26日東京府庁より旅券を受取った彼は29日新橋発横浜に向い、30日常陸丸に乗込んだのである。常陸丸はその日12時出港、12月1日神戸寄港、4日出港、5日門司寄港、岡倉天心はここより乗船、7日出港、11日香港、18日シンガポール、22日ペナン、29日コロンボ着、31日チュチクリン着、ここより列車によってマドラスに向う。1月1日マドラス着、1月4日発列車によって、1月6日カルカッタ着、ラマクリシュナ・ミッションのベルール・マートに到って、岡倉天心とともに、ヴィバーカーナンダ(Swami Vivekananda, 1863—1902)に交流をもつ。至徳は2月1日インドに長期滞留の決意をもってサンスクリット及びインド研究をはじめめる。そのころ2月4日大西良慶宛に書状を出したことが至徳日記に見えている。その内容に何が書かれていたかは今日では知るすべもないが、これに対する返事が書簡第1号である。

岡倉天心は、1893年アメリカのシカゴ市で開かれた世界宗教会議において一躍世界的巨人として認められたヴィバーカーナンダの宗教的意識の非凡であることに感動し、日本より織田得能を呼びよせる。織田得能は明治35年2月22日丹波丸によって横浜出港、4月2日にはベルールに姿を現わした。織田得能到着ののち岡倉天心はヴィバーカーナンダと3人で東洋宗教会議を計画する。それは明治36年4月大阪に於て開かれることになっている第5回国勤業博覧会を機会として、京都に於て東洋宗教会議を開催しようとするのである。4月2日織田得能がベルールに姿を現わす数日前、堀至徳は大西良

慶の書簡を入手している。日記によれば、それは3月29日となっているが、ベルール局3月31日2便の消印があるから、日記の方が間違っている。この頃には既に堀至徳はタゴール一族と交流をもっていた。

岡倉天心・堀至徳とタゴール一族との交流はラーマクリシュナ・ミッションの初期の財政的援助者の一人であったノールウエイ人のオレ・ブル夫人 (Mrs, Olé Bull) の招待会において始まったという。そのときの招待会にはシスター・ニヴェイタも参加して有能なホステス役を果たしたことが伝えられている。俗姓マーゲリット・エリザベス・ノーブル (Miss. Marguerite Elizabeth Noble, 1867—1911) というアイルランド生れのシスター・ニヴェーデイタはこののち岡倉天心の『東洋の理想』に序文を書くことになるのである。タゴール一族と交流を持ったのち、特にラーマクリシュナ・ミッションに用事のない天心は、招かれるままにカルカッタ市の高級住宅街であったバリガンジ通りにあるサテイエンドラナート・タゴール (Satyendranath Tagore, 1842—1923) 邸に滞在していた。一方至徳は引続きベルール・マートに在って、ラーマクリシュナ・ミッションで行われるインド宗教の実際研究に専念していた。バリガンジは大西良慶が訪ねたジョーラサンコとは四軒ほど隔れた場処である。至徳日記にジョーラサンコが現われるのは明治36年1月25日以後である。

至徳は4月下旬、天心・得能とともに仏陀伽耶に仏蹟をたづねている。ビハール州の4月下旬は乾燥期の終りに近く、すべては燃えるような暑さの中にあつた。森には真紅のクリシュナ・チュラの花が火炎の如く真咲りであつた。そして日中でもはや摂氏35度を超える日が続いていたのであろう。4月22日岡倉天心と織田得能とが、東洋宗教会議の事について最終的な相談を為したというその夜は、仏陀伽耶では皆既月蝕であつたと堀至徳は傍観者的立場から日記に書き記している。

書簡第1号・3月6日大日本国奈良県奈良市興福寺大西良慶。(封筒上下に興福寺の小判形印章あり) 印度国カルカッタ・ハウラー郡ベルール村ジ
ー・マツ、大日本国堀至徳君行。

Mr. S. Hori, The Math, P. O. Belur, Howrah, Calcutta, India.

Japan, Naraken. R. Onishi.

(大和奈良局・35年3月6日ハ便
ハウラー・ベルール局・3月31日2便)

赤堀君へ別紙回送致掲載ノ事ヲ依頼 致候

拝復 2月3日出し御書簡6日午前 9時30分到着取急キ開封致候 実ニ
仏出世ノ地ヨリ余カ此書面ヲ 領収セシメテ喜ブ也正月己来 丹波市ノ葉
書ヲ以テ無事到着 之御報ヲ得安心致居候乍ら 何方へ音信ヲ發シテよろ
しきや 相知り不申ニ付御伺不申次第ニ御座候 扱テ貴地ノ模様御報道ヲ
得難有存居候 元ヨリ三千余年之遺址ナレバ迎テ空然 ナル盛大ヲ極メ
シ様ヲ見受クヘキトハ不存申候 唯古代ノ先聖カ遺物トシテ一片ノ朽木ナ
リトモ 其敬慕ヲ医スルニ足る事ニ御座候依書面 飯食臥具医薬に少しも
不足ナキ義ト被察候 主人公ハ大哲学者トシテハ実ニ不思議ニ存候 何ノ故
ニ仏教ヲシテ外国若クハ本国ニ傳播セシメサルヤ 坐禅工夫ノ力は日本ノ
禅僧ト趣ヲ異ニスルヤ 或ハ日本ノ青年僧侶ノ口ニ哲学ヲ唱道スルト 等
シキカ貴下ハ何ヲ為サレ居ラレ候哉

西藏ノ仏教ハ「ヲンマニハトメイウン」ヲ日本ノ念 仏ト同シクニ唱へ居
候トハ嘗テ聞ク所ニ御座候御都合 相ヨクハ一応御遊覽被下度候仏具類ニ
高尚ノ者御 座候ハバ写取り置願度候

日本ノ景況ニ於テハ此頃ハ日英同盟ノ祝賀東西南 北^ア歡娛ノ情吾人ハ其前
途ノ運命ヲ知ラス候 伊藤博文帰朝シテ歓迎盛ナル事ト候ノ得意ト ハ想
像出来得ヘカラサル程ニ候、大隅伯ハ日英同盟ノ主動 ノ内ニアレハ伊藤
ヲ攻撃スルノ地位ニ立テリ、此ハ伊藤カ 同盟成功ノ効ヲ已ニ帰セントス
ル故ナリ、今朝ノ新聞ニ 3月2日夜12時ヲ相図トシ鉅毒被害民大挙上京
ノ 途ニ就キ申候就テハ群馬栃木茨城千葉埼玉等ノ巡查 数百人各要路ヲ
塞グ然レドモ終ニ数千人上京ス4日午前7時 農商省ニ推寄大臣ニ面会ヲ
求ム敷石ニ毛布ヲ敷キ一同之ニ坐シ動カズ 大々的混雜ニ御座候一人ノ佐
倉宗五郎トシテ田中庄蔵アルノミ 是レモナカナカ目的ヲ達スル能ハサル

ニ苦シミ居候拙者方ハ 無事ナリ五重塔ハ明月14日にて九条公爵ノ臨場ヲ
以テ入仏 供養執行準備多忙ナリ

明36年大阪大博覧会ハ未曾有ノ盛事ニシテ各府県ノ 準備ナカナカノモノ
ナリ

日本ニハ未タ活動ノ天地ヲミトメス候帰朝ハヲソキカ宜敷 トテモ日本ハ
ダメナリ大欲三昧ニ入テ大欲ヲ成就セントナラハ何レカ眩 漠ナル天地ヲ
見出ササル可ラズ拙者も今日英語研究中ニ御座候 一方ニは古典ノ取調ヲ
充分ニシ一方ニハ地理歴史ヨリ語学ニ 及ビ数年ノ後ニハ本国ヲ辞サント
存ジ居候人生元^カ 10ノ安ヲ^テ僱ル可ラズ男子至ル処青山アリト聞キ居候
いま50年ノ生命ヲ以テノ日本ニ酬ユル効績ヲ立テタク 熱望致居候故国
山泉別ニ感スル程ノ事ナシ貴 兄モ為シ得ヘクンバ大ニ帰国ノ望ヲ絶テ御
勉強 被下度候西藏以東支那ニハ必ス一^カ生ヲ立ツヘキ地アリ 御奮発を願
候二月堂修二会ニ付参拜ノ処 韃靼ノ行と云ふ事をナサレ居候貴兄カ近傍
ニ 古来韃靼ト呼フ国御座候其地も一^カ応御シラベ被成度候

身体御健全ト願居候生命力ナクテハ目的モ立不 申精々御大事ニ被成度念
上候度々ノ音信モ出 来不申唯西天ヲ望ンデ貴下ヲ追想スルノミ ニ御座
候主人公へ伝言セヨ日本ノ古都奈良 大西良慶が一^カ応来遊 アツテハ如何
ト」先ハ不敢取 乱筆ニマカセ御返事申上候御判読被下度候 早々

3月6日 興福寺良慶

堀至徳尊台

月ノ瀬ノ梅ハ見頃、芳野ハ花ハマダ速シ三笠山モ浅茅カ原モ若芽萌へ出ツ

3. 書 簡 第 2

第2信は3月28日付堀至徳の書簡に対する4月30日付の大西良慶の書簡である。至徳日記の3月28日の項には大西良慶に手紙を書いた事は記されていない。3月29日の項に大西良慶の第1信があったと記しているが、前述の如くこれは日記の方が誤っている。第2信は5月31日2便によってベルール局から配達されたものであるが、至徳日記はこの場合にも5月30日の条に「大

西より来状」記していて、日記の方が誤っている。4月下旬仏陀伽耶からかえって10日ほどすると、ボンベイ経由で来た、日本を1月に発送された、沢山の郵便物を受取っている。

堀至徳は生来蒲柳の質であつたらしく、インドの炎暑と僧院の簡易生活ではどうしても身体の調子が乱れて病気や衰弱が出て、勉強の方もおくれ勝ちになった。インドの酷暑が極まった6月10日岡倉天心と前述のサティエンドラナート・タゴールの長男であるスレンドラナート・タゴール (Surendranath Tagore, 1872—1940) がマートに現れ、衰弱しきっている堀至徳を見かねて、バリガンジにあるタゴール邸に引取られ、タゴール家一同の庇護を受けることになるのである。それは第2信を受取って10日ほど後のことであつた。

第2信で大西良慶が「植畠家ニカカル件」と言っているのは植畠ひさ江のことであつて、このことについてはまた別の機会に触れることにしたいので今は触れない。

6月13日堀至徳はカルカッタから汽車で4時間ほどはなれたボールプールにあるタゴール邸に移っている。そこは後にビスバ・ブハラティ大学となるサンチニケートンのタゴール邸である。そこには1901年12月22日創立された「森の学校 (tapovana)」があつた。ここに移ってから、彼は最初のサンスクリット研究の日本人学生となつた。彼は誰にも煩わされることなく、勉強に精を出すことが出来た。6月22日には後に詩聖と言われるようになるラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore, 1861—1941) からベンガル・スタイルを勧められて、腰にまとうドウテイを贈られている。至徳日記によれば、彼が天台宗留学生であつた大宮孝潤と話し合つたという4月15日の前日には、日本では興福寺五重塔の入仏供養であつた。廃仏毀釈の嵐の中で25円という価格で売却され、買主は全具を獲る目的で焼却しようとしたが、住民の反対で中止したという歴史的事実を秘めて、五重塔はここに燦然と甦つたのである。その主役は大西良慶であつた。そこには唐招提寺・東大寺・興福寺・法隆寺の四管長、法華寺・円照寺・中宮寺の三門跡の出仕による大法要のページェントがあつた。

織田得能は5月下旬には、はやくも東京に帰着していた。

書簡第2号・4月30日大日本 大西良慶ヨリ。印度カルカッタ 大日本人
堀至徳君行。

Mr. S. Hori, The Math, P. O. Belur, Howrah, Calcutta, India.

30 Apr. Naraken, Japan. R. Onishi.

(大和奈良局・35年5月1日へ便
ハウラー・ベルール局・5月31日2便)

拜復3月28日午後5時発之書面ハ今4月30日午前8時着早速披見致候愈御
清 康御修業奉賀候御地ノ模様御報道ヲ得難有奉存候故郷トハ天候格別ノ
事 ニ有之定メテ御困リノ事ト察入候「スワミブベカナンダ」氏ノ事欣慕
ニ不堪候一 応面会ノ上万事物語致度定メテ英語ハ上手ノ人ト信シ居候^{マツ}7
月頃ヒマラヤ山ニ 登ラ^{マツ}レ候由壯快可想遥カニ西天ニ向テ卿カ健康ヲ祝シ
候

他日^{マツ}又タマタ御報道ヲ蒙リ度此音信ハ教主ノ生誕シ玉ヒシ天涯万里ノ報道
ナレバ知己 ニ示シ申度候勉メテ修行被遊様願候本国ハ今10年位ハ御帰無
之テ 宜敷カルヘク「植寫家ニカカル件」ハ小生も他ヨリ聞及居候貴兄カ
心中ニ明カニ御承 知ノコト存じ不申上候が宜敷。御聞キニ相成ヌガ宜敷
候故郷ヲ慕フハ遊 人ノ常ナレトモ君ニハ兎角東天ヲ慕ヒ玉フナカレ。

4月14日ハ彼ノ五重塔入仏供養ナリ九条老公息道実公良叙良致公中川局
田村やす女藤井八木其他五六名外ニ大岡忠明子爵侍医御来寧 北畠水谷川
梶野各男爵「文秀女王, 三門跡, 四管長市中各院ノ 随喜高等官始メ有志
ノ来会南都ハ未曾有ノ盛況ナリキ明治己来ニシテハ22年還仏会ノ 時及今
時トナリ雲ノ如ク潮ノ如ク前後幾万ナルヲ知ラス

御式元ヨリ嚴重ナリ講問論義, 四箇法用会長公ノ願文野衲カ 咒願文ヲ捧
グ余興ニハ古代舞樂ニハ^{マツ}太平樂迦攞頻胡蝶阿舞 納曾利等ナリ餅マキ福錢
マキ太神樂等ノ催ニ御座候候15日ハ光明皇后 ノ御遠忌ニシテ法隆寺式舎
利講式ヲ修行セリ来年ハ東大寺法華堂ノ 入仏供養ニ御座候古都ノ天ハ新

緑滴ル如ク馴鹿人ニ随テ相往来シ 実ニ仙境ナリ来春ハ第5回内国大博覧会ヲ大阪ニ開カル盛況想フヘシ

「丹波市ニハ別ニ郵便ヲ以テ貴下ノ御安全ヲ報知致候間御安心 有之度事前ニ越智宣哲氏ニ面晤ス貴下ノ物語リ 致居リ候 日本ハ此ノ秋ニ衆議員総撰挙ニ付国内大惑乱 ニテ運動可致事ト存シ候宗教界不相変平穩ニ御座候宗 教的事業トシテ目下極メテ無事丸山老師ハ無事山城ニ 暮シ居ラレ候小生も来年東都ニ出張致候事ニ胸算致居候 仏陀伽耶ノ靈蹤ヲ拝スルハ何レノ日ニアルヤ貴下ノ幸福ヲウラヤミ 申候昔時明恵上人渡天ノ志深ク春日神社ニ御告別ノ為ニ参詣 セラルルヤ明神之ヲ止メ玉ヘリト、我等ハ未法凡僧イカテカ如是靈 瑞アラシヤ唯往来ノ自由ナル天地ニ出現セシヨリ有縁ト申ヘケレ

此中ハ兎角雨天つつきに御座候天竺ニテハ雨時ハ永々ノ由ニ書物 ニテ拝見致居候実際ハ如何ニ候ヤラン御地ノ御馳走トハ如何ナル モノナリヤ、豆腐ノ如キモノ御座候哉滋養品トテハ矢張り葡萄 ノ一種ナリヤ坐禅中ハ夜来安眠スルヤ否ヤ食時ハ矢張り一食ト存居候 量ハ如何、酒類ハ不用事必儀ニ候間何か好飲料御座候哉 神通自由ノ人ハ無之哉。矢張り日本ノ如ク末法ヲ申語有之候哉 生活ニ於テ非常ノ金額ヲ用シ候哉小生ノ如キ貧生ニシテ漸ク渡航費 位ニテハ御地ニ行レマシクヤ御地ニテ何か生活ノ道相立得可候哉 托鉢等ハ出来不申哉後便無漏御報道待入申候 世間ニ住シテハ道業不成道業專ニシテハ世人ト出家ス人ト 遠隔シ可ナリトスレハ眷族ヲ養フノ途無之俗輩ニ交ルコソ 浅間敷と存じ何レノ日拝顔ヲ得ヘキ哉 樂ミ居リ申候

東京鶴殿家ノ母ハ感心ノ人ニ御座候近頃大ニ仏学ヲけんきゆう 被致居候 万事無常心より外ニ信するものなし止観ノ力に アラスンハ能はず御修業念居候 早々不備 大和 良慶ら

天竺ニテ 至徳兄台下

郵便ハ1ヶ月相かかり候1年ニ5回位ハ音信出来申候此郵便 税何程ナリヤ御書入被下度候

日本方は10銭ニテ御地ニ着申候小包ト申者ハ貴地ニ流行 不致候や

4. 書 簡 第 3

ベンガル州の7月は雨期に入って、気温は盛時より下っていたのだろう。病気が重かったヴィベーカーナンダの肉体的限界は意外に早くやって来た。1902年7月4日ベルール・マートの僧院で、平常の日課をすましてから瞑想に入った彼は、再び起ち上ることはなかった。年齒僅かに39歳であった。7月10日岡倉天心はカルカッタからサンチニケートンの堀至徳宛に「ビベカーナンダ師去9日死去致候」という葉書を書いている。この日付は公式に発表されているものと異っているが、この日は天心がヴィベーカーナンダの死を知らされた日なのであろう。至徳日記の7月9日の条にマッツヘ手紙を出したことを述べ「ブベカーナンダ四五日以前死亡とある人よりキキシ為也」と書いている。

織田得能はヴィベーカーナンダの死を知らなかった。東京に急いだ彼はすぐ北京に赴き、先年大谷派本願寺の招聘に応じて明治34年日本に来朝して交誼を得たラマの阿嘉呼図克図 (A-chos-hu-thog-thu) に会い、更に南京に行き金陵刻経処の創設者として中国仏教界に新風を鼓吹していた居士の楊仁山と会同して、それぞれの同意と協力を得ることなどに懸命に奔走していた。ヴィベーカーナンダの急死による失意に沈んだ岡倉天心は、10月6日インドを出発、10月30日には神戸に帰着している。このごろから万朝報を中心として急速に高まった日本国内での、天心と得能の二人に対する中傷と妨害の渦巻きの中に、追うちをかけるように肝心の仏教側の協調が得られないことになった。その結果、この東洋宗教会議は雲消霧散して仕舞うのである。日露戦争前夜とも言うべき明治36年、アジアにおいて開催せられるこのような集會が、どのような意味をもったであろうかを考えるとき、この挫折は惜しい。

堀至徳は雨期あけの9月になってから、岡倉天心と別れ、滞在延期の決意のもとにサンチニケートンにあって、専心勉強を続ける。至徳日記には7月

20日「大西氏へ書状」，かさねて11月9日「大西師へハガキ」と見えている。この書簡第三号のアドレスがボールプールのラビンドラナート・タゴール気付になっていることから、至徳の行動は奈良では良く判っていたのであろう。11月14日岡倉天心はビゲローと共に大西良慶に出会っている。ビゲロー（William Sturgis Bigelow, 1850—1926）は滋賀県三井寺法明院のフェノロサの五輪塔と同じ埜域に「月心埜」と刻まれて、日本に眠っている人である。サンチニケータンの至徳は気候の良くなった12月7日から、サンスクリット辞典アマラコーシヤの研究を始めている。大西良慶と岡倉天心の会同の時には、東洋宗教会議のことは話題にならなかつたらしく、第3信にはそれに関する記事は全く見えない。文末に京都興聖寺と見えるのは興正寺の誤である。興正寺は11月29日火災を發して本堂・庫裡など悉く灰燼に歸した。

書簡第3号・明治35年12月10日夜 大日本国 奈良県大西良慶。（封筒上下に興福寺の丸印あり） 印度ベンガル 大日本国 堀至徳殿
Mr. S. Hori. c/o R. Tagor, Bolpur, E. I. R.(Loop) Bengal, India
Japan, Naraken, R. Onishi.

（大和奈良局・35年12月10日ト便
カルカッタ局・3年1月8日午後7.30受付。）
ボールプール局1月10日3便

拝復 爾來甚御無沙汰申上候本国ハ晩秋之期木葉黃落シ尽シ 乾坤轉々寂寞西風破窓ニ音信シ弦月ノ空ニ清キハ一種 ノ無常觀ヲ養フ事ヲ得ルナリ 貴地ハ寒暖計83度ナリトカ 何レ夫レ氣候ノ異ナルノ甚シキ7月中旬ノ酷暑ヲ假想致居候 爾^ニ愈御勉強ノ由ハ去月即チ11月14日ニ岡倉君ガ米国人ノ「ビゲロー」 同伴ニテ入來ノ節承リ大ニ大慶致シ早速書面可呈之処意外ニ 延引相成リ居申候当地ノ事ハ別段ニ報道スヘキ異事ナシ小生等ハ依旧法 務專修尚ホ前々月ヨリ法相宗加行ニカカリ目下樋口君ガ 加行中ニ御座候、日本ハ政治界ニ一激動アルヘキ模様ニシテ桂内閣 ハ地祖増徴ノ繼續ト海軍擴張トヲ以テ議院ト血戦セ^ニスル覺 悟ノ由ニテ伊藤大勲位

大隈老伯手ヲ携ヘテ政府ニ当ル云云ハ 兎耳子ノ唱導スル所ニ御座候教育
 宗家ニテ進歩セル事件ハ 耳ニセス併シ一方ニ倫理ヲ以テ宗教ニ換エン
 トスル井哲派ノ如キモノ雨後ノ草ノ如ク 出立致候、奈良縣ニテハ桜井ニ
 高等女学校設立セントスル運動有之候 本年4月ニハ融通宗派本堂落成致
 候仏骨ハ京都名古屋ト 位置ノ争ヲナシ遂ニ名古屋ヘ東遷致候奈良ハ四宗
 トモ名古屋派ニ御座候 因縁ノ熟スルヲ以テナリ、本宗管長佐伯師、小生
 東京道重師等渡航ノ決意ニテ大ニ 準備致居候佐伯師ハ来春早々先上京
 東京ニ於テ大講堂ヲ設立セラルル 計画ニ有之南都ニハ四宗学林ヲ合同ス
 ル決意モ御座候異國ノ天地ニ再ヒ相 見ル事ヲ得ル日ヲタノシミ居候、本
 國ニハ奇蹟アル僧即チ咒術アル 人ヲ待チツツアリ貴國ニハ定メテ外道中
 ニモ此等ノ術ノ応用スヘキ事可 有ト信シ候人ハ現在主義ニシテ三世ノ如
 キ円満ナル理想ニアルモノハ殆ンド 無之候現世中ニ於ケル利益トハ福智
 若クハ苦ヲ除クヘキ術ヲ成就 セラル、導師ヲ待ツ事大早ノ雲霓も畜ナラ
 ス要スルニ薄 弱ナル溺民ニ候腦裏ニ清涼ナル宗教心ノアルハ見ズ可惜可
 歎 吾人ハ大ニ唱道シツ、アレドモ大潮流ノ中ニ孤立スルモノ唯正ニ真理
 ヲ 目的ニシテ瞑シ畢ル外ナク候、耶教ノ如キモ活動アルヤニモ聴カスコ
 レモ同 シク現在主義ニシテ利益アラハ國人許テ彼教ニ入ランモ必シモ利
 益ナキヲ以テ人 皆一顧タモ為サス可憐ノ至ナリ唵摩尼ト念セラルル老師
 モ目下ハ 依然トシテ塔ノ尾ニ蟄居致シ被居候逆テモ語ラニ足ラス「愛色
 ノ道ヨリ外ニ 何事モナシ」ト通信アリ可惜哉聖天尊ヲ信スル人ハ必ス其
 終ヲ全フセ サル乎非歟小生ハ小生ノ觀念ヲ以テ十三鐘大御堂ニテ聖天供
 ヲ修シ居候 幸ニ感納ヲ得テ万事如意大ニ其威徳ヲ仰キツツ有之候 貴兄
 ニモ是非トモ本國人ノ能シ能サル所ヲ為シ一種ノ光彩ヲ具スルニ 非サル
 ヲリハ一足モ東方ニ歩ヲ転セサルノ決心願上候身体ニ御異状無 之様乍蔭
 念シ居候御郷里ニモ異状無之候間大安心 被下度存候当用迄余所次便申上
 候不備 12月10日夜 大日本古都 良慶
 在天竺 堀至徳殿 京都興聖寺派本堂焼失セリ古社寺実ニ 危険ノ至リナ
 リ

5. 書簡第4

堀至徳が岡倉天心と共に帰国せなかった理由は日記12月1日の部分に 1. 印度ノ研究未了 2. 帰国ノ後ノ挙動 附植一件及興隆上ノ方針 の2項を挙げ、「今や大略印度ヲ了解するを得たり、第2の問題ハ未だ決定せず 右ノ解答心中ニ来ル時ハ帰国ノ途ニツクノかどてならん」と見えている。明治36年1月10日の部分に「大西君より来状岡倉君と面談セリ云云」にはじまり、「本国にハ奇蹟ある僧即咒術ある人を待チツ、アリ云云これ実ニ大に熟慮すべき問題なり」等の書簡第3号の内容にあった記事が見える。

1月24日から堀至徳はカルカッタに滞在している。2月4日「大西師へ書状出ス」と見える。このときもカルカッタからであろう。このころ至徳はたびたびジョーラサンコに出向く機会があった様である。ジョーラサンコはドワルカナート・タゴール・レーン六番地(6, Dwarkanath Tagore Lane)にあって、バリガンジから4軒ほど隔っている。2月13日には横山大観、菱田春草等がインドにやって来た。このころインドでは東洋宗教会議のことが大きな問題となって来て、問合せの電報などを打っていることが知られる。3月27日横山大観・菱田春草はムリク宅よりバリガンジのタゴール家に移る。3月28日にはチベットより帰国した河口慧海に始めて面会する。彼はこのうち、堀至徳の死後、タゴール邸に残置した遺品を日本に送附する役目を引受けることになるのであるが、そんなことは全く知られていなかった。至徳日記は4月12日で終っている。そして7月3日には伊東忠太に出会うことになる。伊東忠太はこのあと11月24日堀至徳の悲劇的な死に立会う役目をつとめるようになることなどは全く夢にも思っていなかった。

書簡第4号に「久々にて遠来之音信」と見えるものは、堀至徳が7月末か8月中旬頃に、大西良麿に宛てて書いたものと思われる。それは伊東忠太に出会ってから後のことで、東部インドの小旅行のあいだにカルカッタへ帰ったときに書いたものであろう。そしてアドレスを「ボンベイ日本領事館気付」にしていることなどは、堀至徳の旅行に対する決意を示すものと言うべ

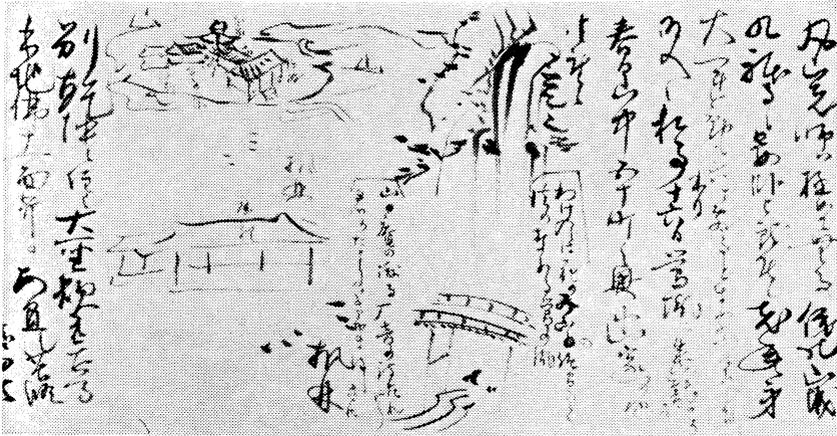
きであろう。書簡第4号は10月26日にボンベイに到着していた。ところが伊東忠太と堀至徳は9月8日から20日迄ボンベイに滞在していたが、10月26日頃には、既に現在のパキスタンの地域に入っていたのであろう。かくして第4信は空しく領事館に留置の後、11日28日になって、幽明境を異にした堀至徳の遺骨の前に供えられることになる。大西良慶の鶯滝練行場の有様などは終に至徳は知ることがなかったのである。

第4信に記される近衛公爵は近衛篤磨(1863—1904)である。彼は明治35年10月乗用の馬車が狂奔、誤って他の門牆に触れた際微傷を負った。その傷は間もなく癒えたが、これがもとで36年6月に至って放線状菌症(アクチノミコーゼ Aktinomykose)を発病、半年加療の効なく、明治37年1月2日終に惜しまれつつ逝去。ロシアに対して深い見識をもった施策は終に生かされることなく消失した。没年は41歳であった。

書簡第4号・9月27日 奈良県 興福寺大西良慶(封筒は特許東京司屋製
・上部に封の墨字あり)、印度孟買市日本領事館留置 奈良県堀至徳君行
Mr. S.Hori c/o Japanese Consulate, Bombay, India.

(大和奈良局・36年9月28日へ便)
(ボンベイ局・10月26日3便)

前略 久々ニて遠来之音信殊ニ なつかしく御座候陳者当方も最早 晩秋之候ニて四山錦繡之時季と 成居候客地とハ定めて殊る時候 と存居候兎角御在所不明之為に 意外之御無沙汰申訳無之奉謝候 追て御勉強被為在居由大慶不過候 為法一層之御尽力相願度当地之模 様ともいつもかわらぬ事のみ御座候、矢の 流るる如き光陰に對し宜敷消光 罷在世間こそ誠ニ未来を知ぬものと より外思はれ候目下県會議員の 撰^ツ挙さわきニて何となくさわさわ致候 丸山老師ハ極めて無事依然山城 九体寺に起臥被致居候老年之身 大運動も六ヶ敷事と御察御氣毒に 存入候私事本月16日鶯滝ニ参籠セリ 春日山中五十町之奥幽邃の地に御座候



「わけ入れは花のみ山の絶間なく

法の声する鶯の流

(挿画)

「山の庵の渡る雁音の待たれけり

君のたよりのきかまほしさに

(挿画)

別乾坤ニ住シ大聖歓喜天尊 本地仏十一面菩薩ヲ安置シ苦修 練行ニカカリ居候10年ハ安居 之心算に御座候迎ても世の中に立ちて 名利之あらそひか果より清浄之咒師 となりて天下国家聖朝の爲め 御加持せばやと存居候談山増賀 堂前年来新築之処既に成 工相成り明後29日入仏式ノ爲め昇 山之都合ニ御座候官林下戻之結果 行政裁判と爲り貴兄らの方が勝利之由ニ御座候山田純精など大 元気に御座候扱て東京へハ8月早々 参り居候処八木夫婦も如何御 暮にやと尋ね居り申候伊藤カ家 老の三男は八月早々ニ米国へ向ケ 出発致候貴兄ニハ別而御異 状も有之間敷御座候杉本憲 大阪ニテ開業之処自身りよまち とかにて転地療養之必要有之爲めに北谷ニ帰り其俣諸人ノ 勸メニ随ヒ開業之由申来候 公爵近衛殿大患ニテ先月 来御加持申居候国家重臣 誠ニ惜ムヘキノ至ニ御座候御平愈

偏ニ祈願致居候故山にはめつらしき 事無之兼て御書中岡倉か東 洋宗数
大会の事申居候と候の 事實は会合の日に早速可申上存じ居候が 失念致
候右ハ未タ実行之場 合ニも立至らざる由に御座候暹国 より来光ありし
御遺形ハ尾州 出来日暹寺造立ノ事に相成り申候 今日ハ彼岸の結日ニ御
座候小生ハ 明朝勤行後下山を致可候 米の豊饒なること一見致し申候
先ハ荒増如斯御座候

御身大切ニ御勉強之程祈上候

卯36年 9月27日 良慶

堀至徳殿 貴台

6. あとがき

明治36年11月29日奈良丹波市に到着した語数六語の電報（発信局ボンベイ
1903年11月28日午後6時45分発信。受信局奈良，1903年11月29日午前4時受
信。）「HORI TABAICHIMACHI NARAKEN OSAKA HORISHINDA
ITOCHIUTA」は突如として堀家親戚一同を悲歎のどん底に陥入れた。取る
ものもとりあえず東京の各方面に当たった上で、堀家からは知友たちに、至徳
の訃音が伝えられた。大西良慶もその一人であった。訃音に先立って大西良
慶の夢の枕辺に至徳が現われたという手紙を大西良慶は書いている。

実ハ前宵夢中ニ 至徳君ニ遇ヒシヲ以テ是レハ 掃朝セラレシ報知ナラン
四方山 ノ談話モ聞キ度ク且ツ出発ノ 時御依頼セシ事ヲモ承リ度ナト相
考 居り候処凶報ニ接シ実ニ一時ニ 非常之心痛仕候誠ニ残 念ノ事返ス
返スも名残惜く存じ候

この書簡は大和奈良局36年12月6日ニ便で受けられ、大和丹波市局36年12
月7日口便で堀至徳の遺族に配達せられている。大西良慶はその手紙を春日
山奥鶯滝で書いた。大西良慶の枕辺に現われた堀至徳は、多武峰の縁故につ
らなる大西良慶に、何を語りたかったのであろうか。

—1975・4・18—

書簡通読については大西良慶和上及び北法相宗宗務所長松本大円師の御協力を得た。特記して謝意を表したい。